



ひらほく新聞

東日本大震災10年
復興はまだまだ道半ば
あの日を忘れず 常に祈り
備え 絆を未来へ語り継ぐ

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

小学生の夢が 天国へ届いた日

(有)クロフネカンパニー代表
中村 文昭

東日本大震災10年
崇拜する愛読紙日本講演新聞に
お願いをしまして、2021年3月8日
号より、転載紹介いたしました。

学力より人間力

僕は「ご縁紡ぎ大学」といって「人間力を高める」ことを目的とした勉強会を全国各地でやっています。

昔の学校は「学力を高める」ということがメインだと思っただけで、社会に出てから本当に必要なことは学力よりも人間力のほうじゃないかなと僕は思っているんです。つまり「あなたから買いたい」とお客さんから買われるとか、「あなたと一緒に働きたい」と社員から言われるような人になる。

人間力というものは学校の成績と違って点数の付けようがありません。そういうものがどんな人にも絶対ある。内に秘めたものがある。それを開かせようというのが「ご縁紡ぎ大学」です。

これが2020年は全国で20校ほど開校する予定だったのですが、軒並み延期、延期となくなってしまいました。

ただ1校、仙台校だけは主催する現地スタッフが「絶対に6月20日に開校する」と決め

ていました。僕は「大丈夫かな」と思いながらその日、仙台に行きました。

スタッフの主要なメンバーは熱かったです。彼らはみんな東日本大震災の被災者で、石巻、気仙沼、陸前高田などから集まってきました。

彼らは「大変な状況だけど電気はつくじゃないか」「水道をひねれば水が出るじゃないか」「食べ物はあるし、何より家がある。そして家族がいるじゃないか」と言っています。

「そりゃあ見えないウイルスとの闘いかもしれんけど、自分たちはあの時、日本中、世界中の人たちから助けられた。なののでいつかは自分たちが東北から日本を、そして世界を明るくしていきたい。そんな意識を持った人間が増えないといけないと思ってる。だからどうしてもやりたかった」と話してくれました。

バッテリーセンターは僕が再建する

その中に千葉さんという受講生がいて、僕と同じ50代の

男性なんです。あの震災で家族が7人亡くなり、小学生の息子・瑛太と2人きりになった人です。

7人というのは瑛太の5歳と3歳の2人の妹、瑛太のお母さん、つまり千葉さんの奥さんです。奥さんの妹さんとその子どもさん、そして奥さんのご両親。

瑛太の夢はプロ野球の選手になることでした。しかし気仙沼に唯一あったバッテリーセンターが津波でなくなっていました。

それで瑛太は「僕が建てよう！」と言い出したんです。千葉さんの仕事は牛乳販売店なんです。お父さんの後ろ姿を見て育った瑛太は「僕はヨーグルトを売ってバッテリーセンターを再建させる」と言い出しました。それで街を歩く人たちに「僕が家の軒先まで届けるので注文してくださいませんか。僕はバッテリーセンターを再建させたいんです」と声を掛けていくんです。

瑛太は僕と会うとよく愚痴っていました。「大人の人は夢を聞いてくれるけれど、僕がバッテリーセンターを再建するという夢を語ると、『絶対無理!』と言ってくる人がいます。『小学生のおまえに何ができるか』とか。そんな言うなら子どもに夢を聞くなよ」と。

打席数が7席しかない訳

瑛太は本気だったんです。その瑛太の思いが人から人へ伝わっていくうちに元ソフトバンクホークスの小久保裕紀さんのところまで伝わっていききました。小久保さんは「何とか瑛太君の夢を叶えてやりたい」と思ったんですね。

プロ野球の選手ってみんな子どもの頃、バッテリーセンターで山ほど練習してきた人たちです。だからバッテリーセンターに熱い思いがあるんです。

瑛太は「気仙沼に何か復興のシンボルが出来れば」と作文まで書きました。それがある作家さんによって本になり、その本の帯に小久保さんが推薦文を書いてくれました。

それでプロ野球選手たちからの多大なる支援が集まって、2年後に「気仙沼フェニックスバッテリーセンター」が完成しました。

「フェニックス」というのは「不死鳥」という意味で、「不死鳥のごとく」という気持ちで付けたそうです。だけど、地元の人には「フェニックスバッテリーセンター」とは呼ばないんです。小学生がヨーグルトを売って造ったバッテリーセンターだから、みんな「ヨ

ーグルトバッテリーセンター」と言うんです。行ってみると打席数はたった7席でした。なぜ7席なのかというと、亡くなった家族の人数分なんです。

打席に番号が振ってあるんですけど、普通は1番、2番、3番ですよ。ここはいきなり37番とかなんです。「なぜ37番なの?」と聞いたら、瑛太のお父さんの千葉さんはこう言いました。

「僕の妻は美奈子という名前でした。だから、美奈子の『みな』を数字に置き換えて37番にしたんです」

違う方向で頑張る と決めた

瑛太も今18歳です。彼は、甲子園に行き、ゆくゆくはプロ野球の選手になりたいという思いで高校野球の強豪校に入りました。練習初日、あまりにも体のデカイ連中が同じ1年生に山ほどいて、しかもレベルが高過ぎる。とてもじゃないけどこの中でレギュラーになるなんて不可能だと思ったそうです。その瞬間彼は入部初日に「諦める」という選択をするんです。

彼は僕に笑顔で「僕は諦めさせられたんじゃない。違う方向で頑張ると決めたんです」と言っていました。

「あの地獄から這い上がってきた気仙沼っ子の根性だけは見せてやろう」と思っていて、死に物狂いで勉強したそうです。そして、イギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学、両方受かりました。

「妹たちを含めた7人分の人生を生きるんだ。7人分、世界中の役に立つ人間になりたいんだ」と瑛太は言っていました。

「その勉強も『頑張れ、頑張れ』と言われて、やらされている勉強だったらあんなに頑張れなかったと思うけど、自分で野球を諦めて、自分でこっちの道に行く」と決めたから頑張れた」と。これは瑛太の魂から出て来ているような言葉だと僕はそう感じました。

【なかむら・ふみあき】18歳の時、上京。焼き鳥屋で出会った人に弟子入りし野菜の行商を始める。それで得た資金を元に六本木に飲食店を開店。21歳で三重県伊勢市に飲食店「クロフネ」、26歳で結婚式ができるレストランを始めて年間50組の結婚式を演出。現在は全国各地で講演会を行う傍ら、北海道、石垣島、伊勢でひきこもり・ニートの若者を集めて農業研修「耕せにっぼん」を運営している。

©日本講演新聞
お試し無料は
公式サイトへ

